

8.7 「先生の学校」 事後レポート

小黒 竜太

1 はじめに

令和1年8月7日の「先生の学校」では、「教育ブームをどう生かすか——多様性のある学びの実現に向けて——」というテーマで発表をさせて頂きました。

この発表のとき、最後を「いろいろな人が、安心安全に意見を言ったり、交流したりする場を作っていきたい」という言葉で締めくくっています。

現在、私は学校現場を離れている立場です。8月7日の発表以来、学校現場に直接実践をする機会はありませんでした。その代わりに、学校現場の方々が外に出て学び、交流する場づくりに参画させて頂くことが度々ありました。今回はそのことを中心に事後レポートとしてまとめます。そして、それがなるべく「学校現場に還元できる内容」としてお伝えできればという視点で書かせて頂きました。ですから、私が関わった学びの場の紹介というより、学びの場で取り組んだ内容や、その可能性、課題について述べたいと思います。

2 学びの場づくりについて

(1) グランドルール

学びの場においてグランドルール (ground rules) は「話し合いのときのルール」という意味合いで使われることが多いようです。これは、参加者が作っていく場合と、その場の指導者やファシリテーター等があらかじめ決める場合があります。あまり面識がない人が集まって話し合いをする場においては、あらかじめこちらでグランドルールを設定することが必要に思います。図1はとあるイベントで実際に用いたグランドルールを示したスライドの一部です。

このようなグランドルールはよく見られるようになりました。このルールも私が参加した学びの場で見たものを参考に作っています。以下に、それぞれについての認識を述べます。

まず「傾聴」です。自戒も込めて書かせて頂きますが、これは話し合いにおいて子どもより大人の方が意識すべき事柄のように思います。学校では、話をよく聴いている子を褒めるなどして「傾聴」が価値づけられていくことがよくありますが、大人が学ぶ場——特に対話が多く伴う場において——でも行うようにしました。「みなさんが頷いて反応して下さりありがとうございます」「今、とても喋りやすいです」という言葉と共にです。

「多様性」についても参加者に意識を持ってもらうことが多かったです。教育に関するイベントにおいて、学校の先生でない人も少なからず参加します。これにより、学校現場にいるだけではなかなか得られないような知見や発想を得られることがあります(そしてこれが学びの場の醍醐味のように思います)。例えば、以前に企画したワークショップで「自分が学校を作るなら？」という問いに対し、ある方から「結婚について学ぶ学校」という答えが返ってきました。現場の人にはなかなかない発想ではない

対話を楽しむために…

- ①「傾聴」 そのままを受け止めよう
- ②「多様性」 否定せず 違いを楽しもう
- ③「時間」 みんなが平等に時間を持てるようにしよう
- ④「前向き」 では、どうする？ 未来志向で考えよう

図1 イベントで用いたグランドルールの例

でしょうか。こういった考えを、まずは面白いと思う雰囲気づくりを目指しました。

「時間」は、最近になって特に気をつけるようになった部分です。以前に企画したイベントで、フリートークのような時間を設けたのですが、参加者の感想で「時間の区切りをつけてほしかった」という旨のものを頂いたことがありました。イベントに参加される方は意欲的です。教育を大枠としたテーマについて、ともすれば数十分対話することができます。なるべく多くの方と交流したり、参加者の発言権を平等にしたりする観点から言えば、対話の時間（特に一人が喋る時間）はある程度コントロールする必要があると思います。

最後に「前向き」です。後述しますが、教育イベントに来られる方々の中で、「悩み」を持っている方が少なからずいらっしゃいます。また、人によっては「憤り」を持っておられる方もいます。参加者が対話していく過程で、教育に対しての課題が浮き彫りになることがあります。その課題は難しいね」に終始してしまい、暗いまま終わるのは建設的ではありません。意見が対立することや大きな課題が見えることもありますが、そこから一歩でも前向きに考えられることを、お伝えするようにしました。

(2) アイスブレイク

8/7にお話しさせて頂きましたが、イベントにおいて「アイスブレイク」という言葉を使わず、いかに自然と、必然性をもって参加者の方が打ち解けられるかについて試行錯誤しました。大人だからといって、企画者が何もしなくとも交流するかと言ったら必ずしもそうではなく、参加人数が少ないなど、場合によってはより丁寧にアイスブレイクの要素が必要になると思っています。

図2は参加者同士で自己紹介をしてもらうために作ったスライドです。ここにアイスブレイクの要素を取り入れるようにしました。あまり派手なことをやる必要はないように思います。アイスブレイクとその後の活動に差があり過ぎると、逆に活動の硬直性が目に見えてしまうときがあるからです。なるべく、その後の活動につながっていくものが良いのではないのでしょうか。図2のときは、会のテーマの一つが「感謝」でした。それを意識して、「最近嬉しかったこと」を、3分以内に、なるべく多く、一人一人が発表していくという活動を取り入れました。

また、参加者の人数が多く、グループごとにアイスブレイク的な活動をしていたときは、終了ごとに全体にフィードバックする時間を設けました。例えば、「グループの中で一番遠いところから来た人から発表してください」という指定でスタートした活動がグループごとに終わったあと、「ちなみに、我こそが一番遠くから来たという人はいますか？」という具合に全体に問いかけます。そしてグループで打ち解ける感覚が全体に波及していきます。会場全体の雰囲気は、イベントの良し悪しを決めるように思います。

もう一つ、スモールステップでの交流も大事なことに思いました。そしてそれは、参加者の人数に関係する部分が多いように感じます。すなわち、100人規模だと4~5人での活動をいきなり始めても大

自己紹介①

- ・名前
- ・所属
- ・来た動機

自己紹介②

「最近嬉しかったこと」
3分で回す

図2 自己紹介のためのスライド

丈夫である場合が多いのですが、それを全体が 10 人くらいの中で行うと、とたんに上手くいかなるということを経験しました。「人に見られている感覚があるかどうか」の違いが原因の一つだと思います。少ない人数だと、一人にかかるウェイトが多いように感じる傾向があるようです。だから、それくらいの人数規模だと、まずは一対一、ペアのコミュニケーションから図るようにしました。

3 成果と課題

8/7以降、さまざまな学びの場の企画運営に携わってきました。その中で、「教員が学校の外で学ぶ」ことの有用性を実感することができました。その理由は様々ですが、一つには前述した「学校では得られない知見が得られる」ということがあります。私は中学校教員として現場にいましたが、常々「小学校、高等学校の先生ともっと交流をしたい」と思っていました。小学校、高等学校の先生方の児童生徒に対する指導観を知ることが有用になるからです。そして実際にたくさんの方からお話をうかがうことができました。

さらに、保護者の立場の方のお話を聴く機会にも恵まれました。このことについて掘り下げます。確かに、学校でも、保護者会や面談など、話をする機会は少なくないと思います。しかし、その機会の形式などから、胸襟を開いて話ができないこともままあるのではないのでしょうか。私は、活動を通して、保護者の方も自分の子についてだけでなくもっと広い概念の「教育」に対して思いを持っているという考えに至りました。そして、そういったことが話せる場づくりの可能性を見いだすことができました。保護者会では面談では自分の子どもについて親も先生が話をするのは当然です。しかし、それだけでなく、もう少し広いテーマで語り合う機会を、学校で作れたとしたら面白いかもしれません。

一方、課題もたくさん出ました。その一つは学びの場が広がったことによる弊害と言えるものです。つまり、「外に出て学びたい」という人が、「ではいったいどこで学ばよいのだろう？」と迷ってしまうのではないかという懸念です。

8/7に「教育ブーム」という大仰な言葉を使わせて頂きましたが、実際に学びの場は実に多様に、現在も広がりを見せています。データがないので恐縮ですが、自主的に学んでいくサークルのような団体は増えているように感じます。そして、それらの中で参加者を確保していくことに苦戦しているところが少なくありません。それはたくさんあるからこそ起こる問題のように思います。また、参加者の人数の少なさに悩むのは本質的なことではありません。しかし、自分に志があったとして、これほどネットなどで「つながる」ことが容易になった時代において、逆につながりにくいという事態が起これり始めているのではないのでしょうか。情報が氾濫したと言われて久しい昨今ですが、教師の学びに関してもそれは例外ではありません。学びたい人がきちんと学ぶためにどうするか、は今後考えていかなければならない課題だと思いました。

また、イベント作りを通して気付いたことは、参加者の中になんらかの悩み、特に自分が普段身を置いている場所に関して悩んでいる方が少なからずいる点です。通っている大学院で受けている授業の一環で、「学びの場への参加頻度と職場への満足度の関連」を調査することになりました。まだ調査中ですが、それも今後に生かしていきたいです。